

# 森林と住のグリーンマネジメント in 九州

国 狭 武 己  
江 口 傳

## はじめに

森林は、元来「人間生活」(広義の「住」)を根底から支えるものとして大きく見直されつつある。この「人間生活」は「生物生活」を内包する言葉として理解できる。すなわち、人間生活は生物の存在を前提とする。言ってみれば、森林は地球生態系の不可欠要因である。

いま人間は、自らの活動によって、自らが内在する生態系(地球環境)を壊そうとしている。これは、人類の自殺行為である。早急にこれを抑止する必要がある。

このような視点から、我々は、平成14年度の1年間に行った調査で得た資料を基本にして、この報告書を書く。

第Ⅰ編(執筆担当:国狭)では「森林・林業—九州を中心として—」に関する研究課題に取り組み、第Ⅱ編(執筆担当:江口)は「屋久島の生態系の形成と維持—森林を中心として—」に関する研究課題に取り組んでいる。

以下、各編の研究課題への取り組み態度を明らかにしておきたい。

第Ⅰ編の研究で明らかにしたかったことは、人類の生命維持システムのきわめて重要な機能(公益的機能=多面的機能)を担う森林が最近、急激に崩壊されつつあることの実態、また、それに日本が大きく関わっていることの実態、そして森林破壊・劣化を抑止するための施策はどうあるべきか、などである。

ところで、森林は林業と密接に関わりあっているので、森林を語るには林業とともに語らざるを得ない。多面的機能を有する森林は、同時に、人間生活に役立つ木材を育成する森林でもある。また森林は、土地を占有するため、特に土地だけを必要とする人間にとっては森林の立木が邪魔な存在としか映らない面も有する。その他の面もあるであろう。要するに、森林はいろんな顔を持つ。それゆえに森林の持続的経営が困難になってくるし、またそれゆえに森林経営に関する研究が必要とされるようになったと考えられる。

森林保全や林業の研究は、世界レベルや国家レベルのものもあるが、当研究では地域レベル(九州)、特に県レベルに中心を置いて調査研究を進めている。それは、地域は世界につながっているという考え方(システム思考)に基づいている。

なお林業は、特用林産物関係のものもあるが、本報告では、木材関係に中心を置いて展開している。

日本の森林は、現在、かなり多くのものは人工林で、原生林または原生林に近い天然林はあまり残っていない。したがって、全体的に見て森林を維持・保全しようとするれば、原生林・天然林の維持・保全はもちろんとし、人工林の管理がきわめて重要になる。

以上のような森林保全の立場から、九州の森林・林業を中心的に取り上げている。

第Ⅱ編の研究で明らかにしたかったことは、屋久島の生態系としての森林(森林生態系)である。では、なぜ屋久島の森林に関心を持つようになるに至ったのか。以下、簡単

に述べておこう。

屋久島は九州本土の鹿児島県大隅半島最南端佐多岬から南に約60キロメートル離れた海上にあり、面積はおよそ500平方キロメートルの小さい島であるが、九州で最高峰の宮之浦岳（1,935メートル）や永田岳（1,886メートル）等の高峰が連座し、気温は平地の温暖・亜熱帯気候から山の斜面を上昇するにつれて低下し、頂上では北海道あたりの寒冷さになる。

このように珍しい地勢を持つ屋久島は、昭和の30年頃までは、ほぼ島全体が原生林で覆われていた。ところが、それ以降、その豊富な原生林の多くが伐採によって消失し、残り少なくなってきた。そこで、残った原生林（ふるさとの財産）の保存に人々が立ち上がったわけである。これに尽力した人々の貢献

を忘れてはならない。そして、やっと一部ではあるが、生態系としての原生林を残すことができた。この森林生態系が世界自然遺産として登録されたのである（1993年（平成5年）12月11日）。今後はこれを維持していかなければならない。

このように、紆余曲折した経緯を経ながらも、やっと残った屋久島の森林生態系は、正に掛け替えのない存在（いまや世界遺産）としてきわめて重要であるという認識から、より深く調査研究してみたい心情に立ち至ったことは否めない事実である。

なお当報告は、紙数や分量等の関係で、「上」「下」の2つに分けざるを得なくなった。「下」は、次年度の本誌・研究所報に掲載する予定である。